

埼玉県IPM実践指標(水稲) (平成17年策定、令和2年9月改定)

管理項目	管理ポイント	チェック欄			
		点数	昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
ほ場及びその周辺の管理	漏水防止やカメムシ類の増殖及び本田への侵入防止のため、以下の事項を実施する。 ①畦塗り及び穴の補修 ②カバープランツの植え付け	1 1			
	刈株や再生株(ひこばえ)はヒメトビウンカ等の害虫の越冬・生息場所となるので、収穫後、速やかに耕うんする。	1			
	翌年のオモダカ、クログワイ等の多年生雑草の発生を抑制するために、冬季に深く耕うんする。	1			
抵抗性品種導入	縞葉枯病抵抗性品種を作付け面積の5割以上で導入する。 いもち病抵抗性品種を作付け面積の5割以上で導入する。 ツマグロヨコバイ抵抗性品種を作付け面積の5割以上で導入する。 地域全体で作付け面積の5割以上で導入する。	1 1 1 1			
健全種子の選別	購入種子を使用する。 塩水選により病原菌に侵されていない健全な粳を選種する。	1			
健全苗の育成	以下の事項を実施して健苗育成に努める。また、病気が発生した苗は早く処分する。 ①苗の種類(稚苗、中苗など)に応じた適正な量を播種し、育苗中の温湿度管理(育苗温度30℃以下)に注意する。 ②ケイ酸質資材を施用する。	1 1			
	種子消毒 農薬による種子消毒あるいは温湯消毒(60℃ 10～15分)を実施する。なお、農薬を使用する場合には、次のいずれかを選択する。 ①廃液が出にくい方法 ②適切な廃液処理方法	1			
育苗箱施用	当該地域の病害虫の発生状況を考慮して、必要と判断された病害虫を対象とする農薬を適宜使用する。	1			
適正な肥培管理と窒素質肥料の削減	県の施肥基準に基づき、施肥量とその時期を設定し適切な肥培管理を実施する。	1			
	土壌の種類や排水性の違いにより肥効が変わるので、土壌診断結果、とくに土壌 CEC 値に応じた減肥や稲の葉色に応じた追肥による、適切な施肥管理につとめる。	1			
	肥効調整型肥料の育苗箱施用により窒素質肥料を30%削減する。	1			
本田期	移植作業 健全な苗を使用し、密植にならないよう、㎡当たり15～18株(3.3㎡当たり50～60株)を植え付ける。その際、移植時期や品種特性を考慮した栽植密度とする。	1			
	雑草対策 前年の稲刈り後の耕うんのほか、化学農薬の使用によらない何らかの雑草管理対策を実施する。	1			
	水田初期除草剤を使用する場合には、環境への影響に配慮して移植後に処理する。	1			
	湛水状態で使用する除草剤を用いる際は、水の出し入れを止めるとともに処理後7日間は落水しない。				
発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手し、確認する。	1			

防除要否の 診断	以下の目安により防除要否の判断を行う。 ①紋枯病： 幼穂形成期～穂ばらみ期の発病株率 15～20% ②イネミズゾウムシ： 5月上旬までの移植では成虫数 1頭/株 5月中旬の移植では成虫数 0.5/株 全作期では移植 10 日後の成虫数 0.3 頭/株 ③ニカメイチュウ第 1 世代幼虫期(6 月下旬～7 月上旬)： 葉鞘変色茎率 5% ④ニカメイチュウ第 2 世代幼虫期(8 月下旬)： 第 1 世代の心枯率 1.0～1.5%、同株率 10%、 越冬世代成虫のフェロモントラップ総誘殺数 400～500 頭/トラップ ⑤ツマグロヨコバイ： 出穂期前後の成幼虫数が 30 頭/株 ⑥セジロウンカ： 7 月下旬～8 月の成幼虫数が 3～5 頭/株 ⑦トビイロウンカ： 8～9 月の成幼虫数が 3～5 頭/株 ⑧イネツトムシ： 幼虫若齢期(ふ化最盛 4～7 日後)の幼虫数 5 頭/100 株 以上により防除が必要と判断された場合には、防除を実施する。	1			
いもち病 対策	ほ場内の置き苗は、補植が終了した時点で搬出し十分な深さの 土中に埋設するなど早急に処分する。	1			
	窒素過多は発病を助長するので、追肥の際は、警報・注意報の 内容を確認のうえ県の施肥基準を超えない範囲で実施する。	1			
斑点米カメ ムシ対策	水田周辺での発生及び本田への飛び込みを減らすため、イネの 出穂期 14 日前までに畦畔及び水田周辺の除草を行う。	1			
農薬の使用全 般	希釈倍率や散布量など、農薬登録の範囲内で可能な限り使用量 を控える。	1			
	当該病害虫・雑草に効果のある複数の農薬がある場合には、飛 散しにくい剤型を選択する。	1			
	農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上 で使用する。	1			
	クモ類等の天敵やミツバチ等の訪花昆虫に対する影響の小さい 薬剤を選択する。	1			
	農薬を使用する場合には作用機作の異なる農薬をローテーション で使用する。その際、薬剤のラベルにある「殺虫剤分類」や「殺菌剤分 類」の番号・記号を確認する。これらがラベルに表示されていない場 合、殺虫剤では IRAC コード、殺菌剤では FRAC コードを参照・確 認する。さらに、薬剤耐性の発達が確認されている農薬は当該地域 では使用しない。	2			
作業日誌	塩水選の実施日、置き苗の処分日、病害虫・雑草の発生状況、 農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法 等、上述のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録す る。	1			
		合計 点数			